

佐藤博士  
古稀記念 佛教思想論叢

舟橋尚哉

この書は律蔵研究の権威者であり、論事の和訳や「原始佛教教団の研究」などで著名な、佐藤密雄博士が古稀を迎えられたのを祝して出版された千頁二十頁にも互る厩大な書である。

さて、この論文集は便宜上五部に分けられており、第一部は印度佛教に関するもの、第二部は中国佛教に関するもの、第三部は日本佛教に関するもの、第四部は佛教学一般、および宗教学に関するもの、第五部は英文および宗教学に関するものとなっているが、私は特に第一部(印度佛教)を中心に書評・紹介しようと思う。

初めに「無記説とパリバージャカ」(石上善応)では、ジャイナ教のアーヤーランガ・スッタにみられる記述が、ブッダの十四無記説の中にある、如来の死後の存在の有無の記述と類似していることを述べ、このパリバージャカ(普行沙門)というのは遊行者のことであり、スッタニパータでも《遍歴の行者》と呼ばれているが、十無記・十四無記の記述の質問者の多くは、このパリバージャカといわれるグループに属する人々であった(六頁)といつて、パリバージャカ(普行沙門)について詳しく論じている。

「浄土教研究における一、二の問題(続)」(春日井真也)では、インドの風土特に雨量と佛教の興起と展開という興味ある問題を取上げてゐる。佛教伝道が降水量二〇—四〇吋地域に設定確立を見るに至つた事実を、地図を示しながら考察し(四〇頁)、そして浄土教研究もこういつた立場から、新しく始められなければならないと結んでおられる。しかしもう少し表題に忠実に浄土教研究の問題を取り上げてもらいたかつた。

「正理学派の推論法に対する唯物論者の難駁」(金倉円照)では、Tatvopaplavasinhaの中の、正理学派に対する論難の個所の和訳が試みられている。この部分は英訳もあるが、英訳の不適當なる箇所や、原文の欠落の部分指摘しつつ、六派哲学特に勝論の権威者として正鵠なる訳がなされている。

「ニカーヤにおける Brahma-と dhamma-との対句用例」(雲井昭善)では、阿舎・ニカーヤに、本来の佛教思想と相容れない思想、もしくはその用語例が見出される。例えばニカーヤではブラフマンは主として梵天の意味で用いられているが、そこには(一)人格神梵天の意味から、(二)神としての要因が脱落していく面も指摘できる。(六三頁)そしてこのようなブラフマンの二面性は既に佛教以前のインド古代思想にも見出されるといふ、また Brahma-と dhamma-との数多の用例を上げて、佛教が本来の佛教思想と相容れない夾雑物、異質物を排除するのではなくて、佛教的受容という広い体質の中で如何に消化していったかを検討している。

「karuṇā, mahākaruṇā, 大悲」(桜部建)では、ニカーヤに

おいて慈悲喜捨が四語一具として説かれるが、しかしそれ以外にも佛陀の慈悲の徳をあらわす語に *karuṇā* およびその縁語やそれからの派生語の用例が多く、後期には *mahakarunā* という語も見出される。大悲 (*mahakarunā*) という語がいつ頃から使われ出したかという興味ある問題を例を上げて検討している。

「大乘十法経の如来蔵説」(高崎直道)では、大宝積経の第九会に収められている「十法経」について、如来蔵説という立場から種々考察されている。

「アショッカ時代の佛教史研究の問題点」(塚本啓祥)では、アショッカの年代や第三結集などについて、新資料によって種々検討を加えている。例えば *vasābhittena* や *vasābhittite* などを「灌頂後満々年を過ぎた年」とみるべきか、「灌頂第々年目」と解すべきかという問題に対して、カンダハールで発見された第二のギリシャ文勅によれば「灌頂」第八年に」と訳しうるといって、後者の説を支持している(二七九頁)。

「無尽財と部派」(友松円諦)は摩訶僧祇律第三十一卷、第十八卷、第二十九卷などに出ている物語を中心に、無尽財を容認する部派などについて、巧みに、わかりやすい文章で書かれている。

「浄土信仰にともなう問題の普遍性と特殊性——名号と変成男子とについて——」(中村元)では、(一)名号 (*namadhyā* 名号)、(二)南無佛 (*namo buddhāya*) とどう表現はサンスクリット佛典のなかにまま見受けられるが(二〇三頁)、「南無阿弥陀

佛」と唱える習慣、あるいはそれに近い、口称念佛がインドにあったかどうか。(二)変成男子は東洋に顕著な封建的な思想の名残りか、あるいは洋の東西を通じて、女性が蔑視されている歴史上の或る時期と関連するのかわ、という興味ある問題を取扱っている。

「清弁の声聞批判——インドにおける大乘佛説論——」(野沢静証)は、中観心論頌註思摂焔第四章「声聞の真実に入る章」の和訳である。

「パーリ佛教における輪廻と解脱」(早島鏡正)では、ブッダゴースアの「清浄道論」の解釈を中心に輪廻、苦、苦滅、涅槃等について論じている。

「三衣について」(平川彰)では、三衣について詳しく説明されている。例えば衣の大きさは、古くは身長に合わせて三衣を作ったが(但し佛陀の衣の量と同じ量の衣を作ってはならない)、次第に比丘の衣の量が規定されるようになったこと、僧祇律における三衣の大きさ、また現在の三衣の大きさについてビルマの僧(大僧正)に直接聞いた回答など(二五四頁)、さすがに律蔵の権威者だけあって実に詳しい。

「華嚴経の譬喩表現」(福原亮蔵)では、華嚴経には譬喩が非常に多いが、譬喩の種類を動物、植物、鉱物、天文、地理、世界、人、天、物象、理法などに分類して種々検討している。

「原始仏教における禪定思想」(藤田宏達)では、禪定をあらわす語の *jhāna* (Skt. *dhyāna*), *samadhi* は原始經典では同じような意味に用いられ、特に区別されていない(二九八頁)

といい、禪定説の成立に関しては、四禪、それに四無色定を加えた八等至、さらに滅尽定を加えた、いわゆる九次第定などの成立問題について、佛教外の説を採用したとする見方と、佛教内で成立したとする見方とがあるが、著者はその素材の多くは外部に由来するが、個々の具体的な禪定体系は佛教内で独自に形成された(三〇四頁)と主張している。

「俱舍論の教義についての二、三の覚え書き」(舟橋一哉)では、宇井博士が佛教汎論の中で「三世実有、法体恒有」の句について、これを「三世に実有なれば……」と解すべきであって「三世は実有なり」と読んでほならないといっておられる。佐々木現順博士はこの点に關し、「三世は実有なり」と読むべきであって、「三世に実有なり」と読むことの誤まりを指摘しておられる(三二八頁)。著者はこれらの説を批評しながら「三世実有、法体恒有」の解釈や、「世」の *Sat* である *advivan* と *Iti* との同異、その他、「無所縁識なし」等をめぐって種々検討を加えている。

「一來について」(真野龍海)では、四沙門果について、宇井博士は「四向四果というときは佛陀の説いたものではなからうと思う」(三三三頁)といわれ、他の学者も佛教としては一來、不還は本旨でないとする(三三四頁)。すなわち、これと関連する生天思想を佛教本来の思想と考えないところ起因する。これに対して著者は「生天説を本来認めないという考え方は、佛教古期の經典、例えば數十という他界説にふれる偈をもつ『法句經』一つ読解しただけでも、空論であり云々」(三三四

頁)といつて生天思想を是認し、「一來は不還とともに、佛教以前のウパニシャット等の生天思想によるものである」(三四七頁)と主張している。

「Guhyasamāja-tantra の五佛説について」(壬生台舜)では、五佛とは大日如来を中心として四方に四佛が配置されるものと、普通に理解されている(三五二頁)。しかし阿闍を中央神として先に挙げ、大日、宝生、無量寿、不空成就と続く系列もあり、これらを資料的に検討して、Guhyasamāja-tantra の前分十八章がどのようにして成立したかを論じている。

「近時の『心性本浄』研究の展開と問題」(西義雄)では、赤沼教授が「原始佛教に於ける心・意識は我々の主観の別名である」といわれる中の「われわれの主観」という表現が極めて曖昧であるとして、この考え方を鋭く批判している(三七二頁)。

「また古奥義書などにおける梵または我は、世界創造主か創造の原理として形而上学的実体であるとされるものであり」云々(三七二頁)といつて、「佛陀の教えが『梵』『我』の語を『心』の語に置きかえて、心性は本浄であるといわれて来た」という赤沼教授の説を批判している(三七二～三七三頁)。また赤沼教授は「心性本浄説を正面から言うものは、原始經典には極めて少ない」といわれるが、著者は金鉞の論説を加えると決して少なくないと反論している。次に口誦暗記の伝承についても、部派佛教徒の態度について、現時の多くの原始佛教研究者の説の如く、部派佛教徒は、彼等に有利な経律等を多く改作又は偽作したとする説に反対し(三七六頁)、この問題について、著者は「自

説を立てるために、部内の比丘達が自分勝手に、自説に過ぎない説を佛説としたり、また経文などを自分に都合よいように新説したり偽作したことは、決してなかったことを意味する」(三七七頁)と例を上げて主張している。このようにこの論文は従来の定説をくつがえさんとする意欲的な論文であるが、残念なことにこの論文には誤植が多い。例えば「格率」という語が二度出るが(三七九頁・一五行と三八〇頁・九行)、「確率」の誤まりかと思わる。また「希待」(三八五頁・六行)も「期待」と普通書くのではなからうか。その他、「わずられしく↓わずらわしく」(三八九頁・二〇行)、「舍利弗↓舎利弗」(三九一頁注⑤)などの校正ミスがある。多分、忙しくて充分な校正が出来なかったためとは思われるが残念なことである。

教論等に関しては「サーンクヤ(数論)の解脱の主体について——サーンクヤ・カールリカー(数論頌)六四をめぐって——」(村上真完)と「ダルマ(法)と智慧の問題——サーンクヤ・ヨーガと佛教——」(山口恵照)の二論文があり、いずれも力作である。しかしサンスクリットからカタカナにする場合、あるいは訳語の上でも、もう少し学者の間で統一出来ないであらうか。Śaṅkyaを前者は「サーンクヤ」とし、後者は「サーンキヤ」としている。訳語の上でも Prakṛtiを前者は「原質」と訳し、後者は「自性」と訳している。buddhiも前者は「覚」、後者は「統覚」と訳している。たまたま教論に関する論文が並んだので特に目立ったのであるが、仏教用語一般についても同じようなことがいえるのではなからうか。

その他、第一部では「入真言門論について」(酒井真典)、「婆沙所取異部教義について」(宅見春雄)などの論文がある。第二部は中国佛教に関するものであるが、「唯識思想の中国の屈折序説」(武内紹晃)は印度佛教思想が中国佛教の中で、どのように展開したかを探らんとするものであり、まことに興味深い。すなわち、世親以前の唯識教学と、法相宗教学との相違点のなかで、最も顕著なものは三性説の上に見られる(五一八頁)といふ、「唯識三十頌」の第二十一頌の後半の偈で puṣ-veṇa sada rāhitataを女婁は「常遠=離前=性」と訳すが、「成唯識論」では「遠離前」と「性」とを分けて解釈して、「遠離前」は空に、「性」はその性として空=性としてしている。これなど rāhitataの taだけに別の意味をもたせたことになり、サンスクリットの上からは到底考えられないことである(五一八~五一九頁)。護法—女婁—窺基と受けつがれた法相唯識のどこで唯識思想の中国的屈折があったかを探らんとし、同じ女婁の門下でありながら異端視された円測の著作に注意し、円測が護法を受けついでいることを事例をあげて説明している(五二二頁)。

その他、第二部では「教相と教判」(関口真大)、「羅什の佛身論」(玉城康四郎)、第三部では「永平教団における寂円派について」(古田紹欽)、第四部では「佛教の真実、中道と涅槃——中道の原始型と根本中の立場——」(宮本正尊)など、現在学会において活躍しておられる一流学者の論文が数多く載せられている。

(昭和四十七年十月、山喜房佛書林、B五版、一五、〇〇〇円)